「平和の福音に生きる教会の宣言（平和宣言）」

序文

第二次世界大戦終結から 80 年を迎えようとしている現在、わたしたちの世界は新たなる国際政治の緊張関係の中に置かれています。とりわけ、2022 年初頭のロシアによるウクライナ侵攻に始まり、その後顕在化してきた東アジアにおける政治的軍事的緊張は、今や再び「戦争の時代」が到来しつつあることを予感させ、核兵器の使用さえ現実のものとなりつつあります。

このような時代状況の中で、わたしたち日本キリスト改革派教会は、主イエス・キリストによって実現された「平和の福音」に生きる教会として、この国と世界の平和に対するわたしたちの使命と責任をここに宣言します。

わたしたちは、創立宣言と 30 周年記念「教会と国家にかんする信仰の宣言」において、第二次世界大戦期の日本のキリスト教会が神と隣人に対して犯した罪を告白しました。それは、軍部主導の政府による教会合同政策に抗うことなく、ごく少数の証し人たちを除いて、御言葉の真理を大胆に主張することも国家に対する見張りの務めを果たすこともできなかったこと、天皇を現人神（あらひとがみ）とする国家神道儀礼に迎合したこと、さらにはアジア諸国の兄弟姉妹たちに寄り添おうとせず、聖戦の名のもとに行われた侵略戦争に積極的に協力してしまったことです。

わたしたち日本キリスト改革派教会は、戦時下の日本の教会が主の御前に犯した罪に共同の責任を負うことを告白するとともに、戦後与えられた信教の自由の恵みのもとで、神の言葉と有神的人生観・世界観に基づく改革派教会を創立し、国家に対する教会の自律性を主張して、宣教と教会形成に励んでまいりました。しかし、その歩みを見つめ直すとき、そこには平和の福音に生きる教会としての使命に応える力も熱心さも乏しく、特に教会内外において社会的・民族的な差別を受けている人々に対する共感や認識も真に不十分であったことを認め、主の御前に赦しを乞うものです。

敗戦後、日本は戦争の反省に立ち、日本国憲法（前文と第 9 条）において二度と戦争をしないことを誓い、戦争そのものを放棄しました。その平和主義と戦争放棄の理念は、戦後日本の出発点であり、日本国民が何度も立ち戻るべき原点です。他方で、在日コリアンや沖縄問題などに見られるとおり、異質なものを排除し、天皇制を中心とした日本の国家体制を維持するために、基本的人権を奪われてきた人々の犠牲の上に戦後が築かれてきたことも忘れてはなりません。

今日、あの悲惨な戦争の記憶の風化とともに、憲法との整合性を問うことなしに、

再び戦争遂行を可能とするための法整備や防衛費の増強・攻撃兵器の導入などが推し進められ、国による政教分離違反行為を司法もまた放置する中で、国家神道勢力復権や憲法改正の動きも収まることがありません。さらに、この国に住む人々の暮らしの現場では、平和に生きる権利を損なう貧困・差別・人権侵害・環境破壊など、経済効率を優先して弱者を切り捨てる「構造的暴力」の力がますます拡大している事実を見過ごすこともできません。

このような現実のただ中で、わたしたちは、主の憐れみを祈りつつ、今こそ「平和を実現する人々は、幸いである、その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ 5:9）との主の御言葉に応え、過去の過ちを繰り返さないために今日と将来の教会への責任を明らかにして、この世界におけるキリストの平和の実現に献身することを誓います。

1.　神の平和と世界の平和

「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました」（二コリ 5:18）

聖書が示す「平和」（シャローム）は、戦争や争いのない状態のみならず、何よりも神との霊的な関係における自由と幸福、肉体的健康や物質的充足、人間関係における調和や喜びをも意味します。それは、創り主なる神によって与えられた「極めて良い」世界に他なりません（創 1:31）。

しかし、人間は自らの欲望と自己中心性のゆえに、この平和を破壊して堕落し、神と敵対し、神と隣人とを軽んじる暴力と混乱に満ちた世界をもたらしました。それにもかかわらず、平和の神は人間を愛し、この世に真の平和を回復するために御子をお遣わしになりました。御子イエス・キリストは、弱さの中にいる人々の病を癒し、空腹を満たして、その心に喜びを与えられただけでなく、十字架の苦しみと死によって敵意という隔ての壁を打ち破り、永遠の平和を樹立されました。

主イエス・キリストこそ、わたしたちの平和です（エフェ 2:14）。それゆえキリストの教会は、主の聖霊による一致と喜びのうちに神を礼拝し、すべての人を尊び、隣人との間にキリストの平和を具現して、この世界に真の和解と祝福をもたらす「平和の福音」に生きる共同体です。

父・子・聖霊なる神の平和は、キリストにおいてすでに実現しつつも、未だ完成には至っていません。世の終わりに至るまで、人間の罪に基づく憎しみと争いは絶えることがありません。それにもかかわらず、わたしたちは、この世界が与えることも保障することもできないキリストの平和に生きる者として、和解の福音を伝え続け、平和のために祈り、この世に真の平和をもたらすあらゆる働きに参与します。

2.　戦争と平和と国家

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。
彼らは剣を打ち直して鋤とし
槍を打ち直して鎌とする。
国は国に向かって剣を上げず
もはや戦うことを学ばない」（イザ 2:4）

神の平和とこの世の平和を同一視することはできませんが、両者を切り離すこともできません。この世界は、神のものだからです。

罪と悲惨の絶えない人間世界には暴力が満ちています。とりわけ、多くの国民を巻き込む戦争や紛争やテロリズムなどによって、いつの時代にも数知れない人々が犠牲となり、それに巻き込まれた人々の心の傷も消え去ることがありません。この世においては、いかなる戦争も、神の前に罪を免れることはできないのです。

聖書における古代世界の戦争記述を通して、神が究極的に教えようとしておられることは、「剣を取る者は皆、剣で滅びる」（マタ 26：52）という真理であり、御自分の民が武力ではなく主に信頼するようになることです。キリスト教の歴史におけるいわゆる「正しい戦争」または「合法的戦争」も、本来、戦争を抑止し正義と平和を維持するための最終手段として容認されたものであり、ましてや神の名の下に戦争を積極的に推進させる「聖なる戦争」の主張は根本的な誤りです。それゆえ、主の教会は、戦争を紛争の解決手段として正当化すべきではなく、まして大量殺戮兵器を用いる現代の戦争を肯定することはできません。

わたしたちは、敵をつくり出し平和問題を軍事的安全保障の問題に置き換えようとする国家的為政者やマスメディアに欺かれることなく、神のかたちに創造されたすべての人間の命を守ることこそが平和の道であると訴えます。それゆえ、戦争を回避して国々の間に平和をつくり出すあらゆる非軍事的な働きには積極的に協力し、とりわけ、核兵器による惨禍を経験した唯一の被爆国にある教会として、核兵器を含むあらゆる大量殺戮兵器の廃絶を訴えます。

この世における平和は、確かに暫定的なものです。それにもかかわらず、わたしたちは、国家的為政者が、世界の平和と正義の実現のためにキリストから委ねられている権能を正しく行使できるようにと祈ります。しかし、彼らが自己の権力を絶対化し、キリストからの権能を濫用し、それによって人々の命と人権が脅かされる時には、毅然として主の御心を宣言して抗議します。さらに、聖霊が促す時には、人に従うよりは神に従うために国家的強制に抵抗し、徴兵制が実施されるような場合には、良心の

ゆえに兵役を拒否する人々と連帯します。

3.　平和と正義と愛の業

「主は平和を宣言されます
御自分の民に、主の慈しみに生きる人々に
彼らが愚かなふるまいに戻らないように…。
慈しみとまことは出会い
正義と平和は口づけし
まことは地から萌えいで
正義は天から注がれます」（詩 85:9、11-12）

神の平和と正義と慈しみは、切り離すことができません。イスラエルを苦難と抑圧から解放された神の律法は、ご自分の民が正義と慈しみに生きることを求めます。旧約預言者たちが、正義と慈しみの欠如した社会を平和なき社会として厳しく批判したように、平和の福音に生きる教会もまた人間社会が生み出す不正義に無関心ではいられません。「正義を洪水のように　恵みの業を大河のように　尽きることなく流れさせ」るのが、主の御心だからです（アモ 5:24）。

正義の神は、何よりそのような社会の犠牲になっている人々を憐れむ愛の神でもあります。人間の罪の悲惨を担われたイエス・キリストにある愛の業（ディアコニア）こそ、この世における神の平和の具体的な現れです。真の平和は力による支配ではなく、正義と公正と隣人愛によってこそつくり出されるからです。キリストに愛されたわたしたちは、この世に満ちる差別・暴力・不正の犠牲者に寄り添い、不安と恐れの中にいる人々の隣人となることを選び取ります。また、加害者の責任を問いつつも自ら罪人であることを忘れずにへりくだり、赦しの愛によって平和をつくる道を模索します。キリストの十字架を掲げる教会は、もはや敵意と憎悪に生きることができないからです。

わたしたちにはまた、神の被造世界における平和と正義を希求し、これをよく治める責任（スチュワードシップ）が委ねられています。それゆえ、すべての人間の命を脅かす生態系の破壊や原子力発電所問題など、環境を巡る平和と正義にも関心を持ち続け、被造物の保全と回復のために努力します。

4.　平和のための協働と連帯

「できれば、せめてあなたがたは、すべての人と平和に暮らしなさい」（ロマ 12:18）
「あなたの子らは皆、主について教えを受け、あなたの子らには平和が豊かにある」

（イザ 54:13）

主イエス・キリストにある愛の交わりが、神の平和の礎（いしずえ）です。わたしたちは平和をつくり出すために、民族や国境を超え、教派を超えて、すべてのキリスト者と協働し連帯します。キリストにある神の子らの一致こそ、この世における最も鮮やかな神の平和の証だからです。

様々な矛盾に満ちた罪の世界に平和をつくり出すためには、忍耐と知恵、聖書に基づく信仰的洞察が必要です。わたしたちは、この世における平和と正義の実現のために、自らの確信を堅く保つと同時に、思想・信条・宗教・民族・人種・性など、あらゆる違いを越えてすべての人を尊び、謙遜に対話を重ね、個々人に与えられた務めと関係を通して共に働きます。すべての人と共に平和に生きることが、主の御心だからです。

この世における平和はまた、絶えずつくり続けなければ失われます。それゆえ、過去の過ちから学んで未来を切り拓く次世代への平和教育は、教会の重要な責任と課題です。わたしたちは、次世代の若者たちと共に神の平和を喜び、教会と家庭と社会において共に学び・語り・労する具体的プログラムを通して、平和を実現する人々を育てます。

5.　終末における平和の希望と祈り

「これらのことを話したのは、あなたがたがわたしによって平和を得るためである。あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ 16:33）

終末において、神は完全な平和をこの世界にもたらされます。その日に至るまで、わたしたちはなお自分自身とこの世界の罪の現実との戦いを避けることができません。

しかし、わたしたちの主はすでに勝利しておられます。わたしたちは、何よりもまず、自らの心の中にキリストの平和を築き、この平和を喜ぶ力によって憎しみや失望に打ち勝ち、決して諦めることなく平和の道を模索し続けます。

この世の悪しき霊との戦いに神の武具を身に着けて立ち向かい、平和の主の到来を待ち望みつつ、心を高く上げて祈ります。

平和の君である主イエス・キリストの父なる神よ、
憎しみと争いの絶えない世にあって、

あなたが御子によってもたらしてくださった平和の道を、
わたしたちが生きて行くことができるように助けてください。

わたしたちの罪をきよめ、あなたの平和の道具としてお用いください。
言葉だけの平和に終わることのないように、
平和を実現するために必要な知恵と力を、聖霊によってお与えください。

あなたによって立てられた為政者たちが、
「剣を打ち直して鋤とし　槍を打ち直して鎌とする」勇気を与えられ、
平和のために働くことができますように。

何よりも主ご自身が愛と正義と平和の御国を
速やかに来たらせてくださいますように。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。

主の二〇二三年一〇月一九日　日本キリスト改革派教会第七十八回定期大会